今を生きる子どもたち

貧困と格差の拡大のなかで

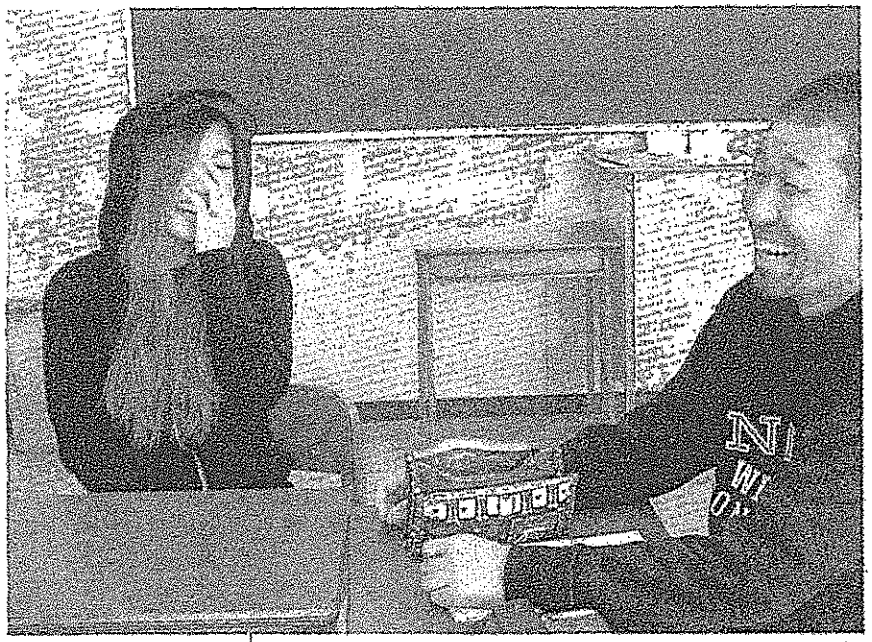
①

5/1 京新

夕食を家族で囲んだり、家で勉強したり。そんなあたりまえのことがあたりまえにできない。そういう難しさを抱えて日々を送る子どもたちがいます。貧困と格差の拡大のなかで生きづらさを強いられた子どもたち。日本社会の片隅で、懸命に生きる彼らと支援する人たちの姿を追いました。

（荻野悦子）

中3で妊娠「がんばるしか」



通信制高校の元担任（右）と話す美優花さん

関西の通信制高校を卒業したばかりの松田美優花さん（19）には、もうすぐ4歳になる子どもがいます。

学習でつまずき

美優花さんは、小学5年生くらいから学習面でつまずき、遊びに夢中になりました。中学校からずっと、「しょうもないことでいっぱい注意された」といいます。上履きのかかとを踏んだとか、寒いからと制服のスカートの下にジャージーをはいたとか、上からひざかけをまいたとか。「生徒のためといいながら、自分の気分や、まわりの目を気にして（教師が）いってくるのがわかるねんな」

同じ年ごろの子どもたちのたまり場で午前3時くらいまで菓子を食べながらしゃべったり。酒やたばこに手を出す子もいました。両親は仲が悪く、中2の初めから付き合い始めた彼氏といるときが一番落ち着けました。同級生でした。

「めっちゃ好きで、いつも一緒だった」という美優花さん。頭のすみをよぎることはあっても避妊を真剣に考えたことはありませんでした。「あのころは先のことを考えたことがなかったから」

中学3年生の10月に妊娠がわかり、高校進学をあきらめました。「母は応援してくれたけど、本当は反対だったと思う。たくさん悩んだけど、産みたい気持ちが大きかった」といいます。

行く先々で冷たいまなざしに取り囲まれながら、家族の支えで無事出産しました。「高校だけは」という母親の希望で、公立の定時制高校に入りました。

美優花さんの両親はやがて離婚。母親は美優花さんと美優花さんの子ども、美優花さんの妹弟合わせて5人を養っています。

学校を続けられず、知り合いから「行ってみたらおもろいで」とすすめられた私立の通信制高校に入り直した美優花さん。「ここも最初はだるかった」と振り返ります。

必要な単位の授業を休むことが多く、「連絡のとりにくい生徒」の一人でした。遊びたい気持ちが強く、アルバイトも長続きしません。2年生の終わりごろ、みかねた担任教師が「それでいいのか」と語りかけました。

学校楽しくなり

明るい表情で美優花さんがいいます。「この学校の先生は、ちゃんと一人ひとりのことを考えてくれるし、向き合ってくれる。それがわかった。今までの学校とぜんぜん違う」

学校に通う日が増え、「授業が楽しい」「人のことを大事にしよう、その時間を大切にしようって思えるようになりました」。

卒業の2カ月ほど前に、彼氏と別れてしまいました。「束縛がやばかったから」といいます。卒業後の進路もあいまいです。「やりたいことがない」。それでも、「美優花の一番は子どもの成長。産んでよかったと思えるから、がんばるしかない」と前を向きます。

（つづく）